第２章
園児の理解に基づいて環境を構成するための具体的な考え方とポイント

第１章では、「環境を通して行う教育及び保育」の基本的な考え方について述べてきました。「環境を通して行う教育及び保育」を展開していく際には、園児の理解、園児の理解を基にした指導計画の作成、指導計画を基にした環境の構成、活動の展開、それらを関連させながら行う評価や改善を、日々行っていくことが重要となります。これらが循環していくことが、より園児の育ちにふさわしい「環境を通した教育及び保育」を展開していくことにつながっていきます。

第２章では、第１章の基本的な考え方を基に、「環境を通して行う教育及び保育」を展開していくために必要なことについて、一つ一つの内容や関連性などを取り上げながら、具体的な考え方やポイントを説明していきます。

１．環境を構成するための具体的な考え方

「園児の理解」は、幼保連携型認定こども園の「教育及び保育」において欠かすことのできない重要なものです。

特に、保育教諭等が「教育及び保育」において環境を構成していく際には、的確な園児の理解の下、園児の実態に応じて必要な経験や発達の方向性を思い描きながら指導計画を立て、作成された指導計画のねらいを達成できるよう、人や物、場や空間など様々な事柄を関連させながら環境を構成していきます。そのため、「園児の理解」は、実践の前提であり、実践の始まりとも言えるでしょう。

ここからは、園児を理解する際には、「どのような視点から園児のどのような姿を捉えていくことが必要なのか」について取り上げてみましょう。

(１)「教育及び保育」における「園児の理解」

①園児一人一人を理解するための視点

〇園児の姿をその園児らしさや育ちつつある姿として肯定的に捉える

園児は自ら環境と関わる中で自己を発揮し、他の園児と試行錯誤しながら、いろいろな体験を通して様々なことを学んでいきます。そうした園児の生き生きとした育ちつつある姿には保護者や保育教諭等、周りの大人からの肯定的なまなざしがぜひとも必要です。

例えば、入園間もない時期に泣いている園児の姿は、単に泣いている消極的な園児としてではなく、自分の思いを泣くという行為で表現することで、大好きな保護者と別れた寂しさを乗り越えようという姿と受け取ることもできます。また、いろいろな場所へ動く園児を、一見して落ち着きの無いような園児として見えても、周囲の様々なことに興味をもち自ら関わっている園児と捉えたり、その場にじっとしている園児でもじっくりと周囲の物事を観察し、考えて行動することのできる園児として理解することもできます。その園児の個性あるいは、その園児らしさとして園児一人一人を肯定的に見ることができることも保育教諭等の資質・能力としては重要なことなのです。そのような視点で園児を捉えながら、今、ここの姿からどのように体験を積み重ねていけばよいのかを考えていくことが大切です。

〇生活の中にある「具体的な事実」から、その園児の中で育ちつつあるものを理解する

「教育及び保育」という営みは、その園児を理解することから始まります。生活の中にある「具体的な事実」からその園児の中で育ちつつあるものを捉えることが重要です。まずは、「〇〇していた」「〇〇とつぶやいていた…」など、その園児の息づかいや体温を感じ、その園児に寄り添いながらその姿をメモに取ったり、写真に撮ったりしながら「具体的な事実」を多く集めていきます。そして、それらの集めた事実を基に、何が育ちつつあるのかを解釈していきます。

ただ、その解釈の精度を高めていくには、園内の保育教諭等同士での日々の話合いや園内研修で検討し合うことなどが必要です。「具体的な事実」の中にある園児の姿から具体的なねらいを立て、その園児の姿から振り返ることを大切にした実践でありたいものです。

では、実際に園児を理解していく際に大切にしたい保育教諭等の視点や、方法などについて考えてみましょう。

〇園児と保育教諭等との温かい関係を育てる

移行や入園間もない３歳児の頃は、保育教諭等との信頼関係に支えられながら、新たな生活に慣れ親しんでいきます。

Ａ児は入園してすぐの頃、毎朝保護者と離れる際に泣き、保護者を求めていた。担任は「離れるのは嫌だよね」とＡ児の気持ちを受け止めながら抱っこをして気持ちが落ち着くように関わりながら、少しずつＡ児が周囲の環境に目を向けられるように言葉を掛けていった。

Ａ児は虫に興味をもっていたので、保育室の入口にダンゴムシの虫かごを用意し、目が向くように指をさしながら話し掛けた。興味をもっているものを見付けると涙も引いていき、「ダンゴムシ捕まえに行く！」と気持ちが切り替わり、部屋の外に出て行く。担任が遊びの中で顔を見合わせながら一緒に捕まえたことを喜んで笑顔で接していくことで、登園の際も担任の姿を見つけて笑顔で保育室に来る姿に変わっていった。

園児一人一人の成長を願い、「〇〇できるようになってほしい」などという思いは保育教諭等であれ誰しももつものですが、保育教諭等の思いや願いの前に、その園児の思いや願い、心もちなどを受け止めることがまず必要でしょう。

また、園児が保育教諭等と一緒に活動する中で保育教諭等が「楽しいね」とその園児に共感したり、「できた」という瞬間や、走っていて転んだときなどに保育教諭等に目を向ける際、「すごいね」「痛かったね」と、その瞬間を逃さずに目を合

わせて気持ちに寄り添うようにしたりして常に見守っていくことで、園児一人一人の中で保育教諭等への信頼感が芽生えていくようにすることが大切です。園児一人一人が自分のことを保護者など以外にも大切に思ってくれる「担任の先生」との温かい関係があってこそ「教育及び保育」が成り立つと言えるでしょう。

〇園児の視点に立ち、一人一人の心の動きを探る

園児一人一人の心の動きを探るには保育教諭等が直接尋ねるのではなく、時には声を掛けずに見守ることや、園児同士の関わりの中から読み取ることも大切です。

以下では、５歳児が異年齢学級のグループ名を何にするかについて話し合っている場面でのことです。

どうしても「最強」という言葉を入れたいというＢ児の主張に対して、他の園児たちから「“最強”ってなんか強くて怖い気もする…」という意見が出た。Ｂ児は「だってかっこいいもん！」と意見を曲げようとしない。担任は頑なに曲げないＢ児の気持ちも受け止めつつ、自分たちで話し合って決めてほしいという思いから、周りの園児からどのような考えが出てくるのか様子を見守ることにした。なかなか話合いがまとまらなかったが、「皆が分かる言いやすい言葉にしたい」という思いは共通になった。

また、「年少さんってその言葉分かるのかな？」と担任がそっとつぶやき、Ｂ児も含め、皆がどのような反応をするのか探ってみた。すると「年少さんを連れてきて聞いてみよう！」という提案が出て、すぐに年少児を呼びに行った。そこに来た年少児に皆で「“最強”って言葉分かる？」と訊ねると「…分かんない」という年少児たち。その言葉を聞いた途端、皆がＢ児の反応に注目した。Ｂ児もその言葉を聞きはっとして、「…やっぱ“最強”入れんとこう！」と自ら言葉を入れないという提案をした。Ｂ児は、自分だけの強い思いで付けたい名前を押し通すことから、三学年が関わる兄弟学級の名前だからこそ、皆が知っている言葉で名前を付けたいという思いに変わっていった。

この場面で、もし保育教諭等が、話合いが揉めることを避け、早く決めようという思いで園児たちに関わっていたら、Ｂ児がこのように他者の視点に気付き、自ら納得して意見を変えることは難しかったかもしれません。Ｂ児が思いを尊重してもらったことが、結果としてＢ児自身が年少児の思いを尊重する成長につながっていったのではないでしょうか。園児たちの目に見える行動や発言のみではなく、行動の背景にある、園児一人一人の気持ちや考えなどに目を向け、その心の動きや何が要因となって心が動いたのかなどを見落とすことのないよう、丁寧に捉えていくことが大切です。

〇園児一人一人の内面を理解する

４歳児が、作ったものを見立てながらお店ごっこを楽しんでいた。Ｃ児は別の遊びをしながら、じっと店員役の友達の姿を見ている日がしばらく続いた。ある日、部屋にあった段ボールハウスの中に隠れてこそこそ何かを書いていた。普段から絵など製作を始めると長い時間を掛けて作り上げる姿があったが、時には自分の絵の中に「へた」と文字で書くなど、自信がもちにくい姿があったため、担任は、あえて声を掛けずに見守っていた。

その日、園児たちが帰った後にＣ児の書いていたものを見てみると、以前に年長組からもらったような「お店のチラシ」ができていて、店名やメニュー、おすすめの商品まで詳細に文字や絵で描き表してあった。次の日、出来上がったチラシを自分で持って見つめる姿があったため、担任が「それな～に、すごいね！」と声を掛けると、嬉しそうな表情で見せてくれた。そして、担任が「チラシを他のクラスに配りに行こうか」と提案すると「いいよ～」と前向きな返事が返ってきた。その日を境にお店屋さんごっこに参加するＣ児の姿が見られるようになった。

「入れて」とすぐに言葉にして参加したい気持ちを伝えられる園児もいますが、Ｃ児のように、参加したい気持ちを表面に出せずに、一緒に遊びたい、自分なりにこのようにしてみたいという気持ちを内に秘めている園児の姿も見られます。園児が発する言葉だけではなく、目線、表情の変化、行動、製作物など、様々な視点から園児の内面を理解していくことが大切です。

〇園児一人一人の発達の過程を長期的に見る

Ｄ児は、３歳児のときから清掃車などの「はたらくくるま」が大好きだった。また、絵を描くことが得意であった。まだ人に対しての興味は薄かったが、好きなことに没頭する姿があった。

４歳児の頃は、他の園児への興味があまりなかったため、友達と遊ぶ姿はほとんど見られなかった。担任は!n児の好きなことに寄り添い「はたらくくるま」の写真などを用意し、思う存分、絵を描き続けることができるような環境を構成していた。Ｄ児の姿を見ていた周りの園児たちも、Ｄ児は清掃車などが好きなことをよく知っていた。あるとき、他の園児から絵が上手だと認められたり、清掃車が走っていることを他の園児に教えてもらったりする度に、嬉しそうにしているＤ児の姿があった。その頃から少しずつ他の園児にも目が向き始めた。その後、他の園児が恐竜の絵を描いていたことからＤ児の興味は恐竜に変わり、様々な恐竜の絵本や図鑑を見ることで、恐竜のことをたくさん知り、誰よりも恐竜に詳しくなった。やがて、年長になり気の合う友達との仲が深まり一緒に遊ぶことを楽しむようになった。誕生日会の出し物では自分の得意な絵を描き、「おえかきクイズ」で皆の前でクイズを披露する姿が見られるようになっていった。

３歳児の後半にもなると、保育教諭等としては、少しずつ周囲の友達に親しみをもってほしいと願い、保護者も友達との関わりが少ないことを心配する様子が見られることもあります。しかし、Ｄ児の場合は、保育教諭等が無理に友達と関わることを求めるのではなく、Ｄ児の好きなこと、得意なことを十分に体験できるよう関わってきたことが、Ｄ児がもつ魅力を一層育てることにつながっていきました。そして、Ｄ児が自分のしたい遊びを十分に楽しみながら、園生活の中で安心感や満足感を味わうことが、４歳児後半頃から見られる友達と関わる育ちの姿へとつながっていったと言えます。

園児一人一人が興味や関心をもって環境に関わり、自分のしたい遊びを十分に楽しみながら、安心感や満足感、人との信頼関係を築いていくことが、年長児に向けて友達との関わりを深める基盤になっていきます。そうした時期の園児の姿だけを捉えていくのではなく、園児の発達の過程を長期的に捉えながら、園児一人一人が今、体験していることは何か、そのことがどのようにその後の体験と関連性をもち、今後の発達につながっていくのかを考えていくことが大切です。

②園児一人一人を理解していくための手立て

○「教育及び保育」の中での触れ合いを通して園児一人一人を理解する

次に、園児を理解していく際の手立てについて、いくつか例を挙げて考えてみましょう。

園児を理解するときには、様々な角度から細部にまでこだわって分析する視点と、物事を全体から捉え広い視野をもって見る視点の両方をもつことが大切です。

４歳児のＥ児は生き物が好きで、様々な生き物に触れ合うことを楽しんでいた。虫などの生き物を捕まえたときに見せる表情はとても生き生きとしており、「むしさん、みつけた！」「あ！あそこ！」と発する声のトーン、見付けた物をじっと見ている視線から、Ｅ児の心が動いていることを感じる瞬間であった。しかし、捕まえた生き物を指先で転がしている間や手の中でつぶしてしまうことも多かったので、担任は、どのように持つと虫が元気でいられるのか気が付いて、命を大切にしてほしいと願っていた。Ｅ児の気持ちを理解しようと、担任が一緒に虫捕りをしていると、手先が器用でないために虫をつぶしてしまうことが多いことに気付いた。また、手の平で動かない虫を見た後に、その場にポイと落とす姿や、手をパンパンと払うなど、まるで動かなくなった虫を物のように扱うように感じた。そこで担任は、一緒に捕まえた虫をケースに入れ、虫を図鑑で調べ、どんなところが好きか、何を食べるのかなど、本児が捕まえた「むしさん」の特徴を一緒に調べていくことにした。

すると、新しい知識として得たり、前日とは違う変化に気が付いたりする姿が見られた。少しずつ「わ！みて！みて！」「○○になってる！」と、虫を観る表情や視線など言動が変化していった。また、虫を育てていく過程で、手の中で動かなくなっている虫がいると、「（園の裏庭に）埋めにいく」と言い、大切に持ちながらそっと元の場所に返す姿も見られるようになった。

保育教諭等が園児と生活をする中で、園児一人一人の興味・表情・言動などを触れ合いを通して感じながら分析し理解していくことは、特に重要な視点であると言えます。保育教諭等が園児と共に遊び触れ合うなど、息づかいを感じられるような距離感で園児の思いに寄り添うことで初めて園児が何を思っているのか、どのように行動しているのかなどについて理解できるようになっていきます。

○記録を通して園児一人一人を理解する

園児を理解するためには、園児一人一人の生活や遊びにおける実際の場面で行動をよく観て、記録していくことが必要です。記録の方法としては、メモやエピソード、写真、動画などが考えられますが、具体的な行動や発言、表情などの事実を記録することが重要です。

エピソード記録は、それぞれの場面で保育教諭等が感じた印象なども含めて記録できますが、主観的になり過ぎることもあるため、写真や動画なども活用して、園児が何を楽しんでいるのか、どのような気持ちでいるのか、どのような力が育とうとしているのかなどを、園内の保育教諭等と共に語り合いながら考えていくことも大切です。

４歳児のＦ児が、ベランダの前の絵の具遊びの場で、物や人などの形を描くのではなく、数種類の色の絵の具をひたすら筆でぐちゃぐちゃに画用紙に描いていた場面について、担任は「Ｆ児の幼さを感じるエピソード」として記録していた。４歳児として遊びを発展させたいと考えた担任は、主任に相談して、Ｆ児の遊んでいる場面を写真と動画で記録してもらい、主任や他の保育教諭と動画を観ながら振り返りをした。

すると、Ｆ児は筆で絵の具を滑らす感触を楽しんでいるようにも、塗ったところが広がっていくのを楽しんでいるようにも見える。やがて、何色もの絵の具の筆を全部一緒にもって混ぜたりするようになり、色の変化を楽しんでいるように見えた。担任は、Ｆ児に、担任として育ってもらいたいという思いを誰よりももっているが故に、つい何かを描いてほしい、描かせたいという気持ちから、できているかできていないかという視点で捉えてしまっていた。しかし、他の保育教諭の目から客観的に見ると、Ｆ児なりに思いをもって様々に試行錯誤しているように思えた。

このように、客観的な事実を元に他の保育教諭等と話し合い、意見をもらうことで、その園児のよさや育とうとしていることが浮かび上がってくることがあります。そして、日頃からこのような園児の姿を基にした記録を積み重ね、職員同士で園児の姿や育ちを共有したり、懇談などで保護者に育ちを伝えたりすることで、保護者とも園児の姿や育ちを共有することができ、更に深い園児の理解につながっていきます。

また、記録には様々な様式が考えられます。園内で共通の様式を用いて記録をしていくことは、園内の職員同士で共通理解しやすいというメリットがあります。しかし、ただ決まった様式があればよいということではありません。記録をしていく上で重要であるのは「何を視点にどのような園児の姿を記録していくか」ということではないでしょうか。

例えば、まずは園児の姿から、一日の「教育及び保育」の流れをつくることを大切にしていきたいと感じている保育教諭と、一つの遊びの場面から園児の経験していることや発達の状況をじっくりと読み取っていきたいと感じている保育教諭とでは、記録をするときの視点が違うことが予想されます。何を視点に記録をしていくのかによって、よりふさわしい記録の方法や様式もあることでしょう。記録は、書くこと自体が目的ではなく、記録をすることで、園児一人一人を理解していくことが目的です。園児の理解につながる記録の在り方も園内で工夫していくことが必要となるでしょう。

園児の行動の事実を記録した上で、なぜ園児はそのような行動をしたのか、どのような状況が要因となったのかなど、その行動の意味や背景などを読み取っていくことが重要です。その際、保育教諭等の援助も併せて記録していくことで、園児を理解していくこととともに、保育教諭等の関わりに目を向け、指導の改善にもつながっていくことでしょう。

〇家庭からの情報を園児一人一人の理解につなげる

４歳児のＧ児は園内の保育教諭等や園に来た他の保護者に対して、いつになくスキンシップを求めたり、また、活動の節目に切り替えが難しく遊び続けたり、部屋から飛び出したりするなど、落ち着かない姿が見られた。園での様子を保護者に伝え、家庭での様子を聞くと、「小学生の兄に手が取られ、ゆっくり関わる時間が取れていなかったり、兄の習い事を優先し、本児に無理をさせたりしているところがあったかもしれない」ということだった。保護者から話を聞いたことで、Ｇ児が部屋から飛び出していく姿は、保育教諭等が呼びに来ることを想定して１対１の場面を求める行動と理解ができ、その後の関わり方に生かすことができた。

集団生活を通した教育の場である園と家庭とでは、園児が見せる姿は違っていて当然です。例えば、移行や入園間もない園児は、まだまだ園で安心して過ごすことが難しいため、安心して振る舞える家庭とは異なる姿になることもあります。また、逆に園では張り切って着替えをしたり、給食で出てきた苦手な野菜を食べたりする姿を見せている園児が、家に帰ってからは自分の好きなことだけをして過ごすという例もあります。

保育教諭等は、園と家庭における園児の生活の連続性を常に考慮し、園児が見せる姿に配慮しながら丁寧に関わる必要があります。

複眼で園児の理解ができるように、日頃から家庭との連携や情報交換を心掛けることが大切です。特に、学級懇談の際には、保護者に日頃話ができない、園での生活や遊びの様子、「教育及び保育」におけるねらいなどを伝えたり、また、学期ごとの個人懇談では園での様子を伝えたり、家庭での様子を聞いたりすることも大切でしょう。

③園児一人一人の理解を深めるために必要な、職員同士のコミュニケーションの工夫

〇日常のコミュニケーションを大切にする

園では、全ての職員が協働していくことが大切です。そのためにも、職員同士が日頃から互いにコミュニケーションを取り合うことを心掛けたいものです。

園内外で行われる研修などのような場だけでなく、日常の休憩や午睡時などに他の保育教諭等と話す機会をもつことで、実践などに関連して自分なりの捉え方が広がったり、深まったりすることがあります。自由に語ることで自分自身の園児の捉え方の特徴に気が付いたり、他の職員の捉え方を知ったりすることができ、その園児をより理解する可能性が広がっていきます。こうした場面で気軽に意見を交換し合う保育教諭等同士の話合いの土壌ができていれば、具体的な課題を話し合うときにも気兼ねなくそれぞれの意見を伝え合うことが可能になります。

適切な園児の理解には、自分自身の園児の捉え方の傾向を知ることが大切です。園児の捉え方の傾向は、なかなか自分自身では気付くことができません。保育教諭等が気付いた園児の姿は、園児と保育教諭等の関係性や場面の中で出会った園児のごく一部分です。自分自身の傾向は、他者との相違でより浮き彫りになります。園児のありのままの姿を捉えるためには、多くの視点で多角的に捉えることが大切です。一人一人の園児の育ちのプロセスやこれまで経験してきたこと、その園児が興味や関心をもってきたこと、場面によって見せる姿の違いなど、保育教諭等との関係性によって見え方が異なることもあります。このように自由に話し合うことで、保育教諭等の園児に対する理解や考え方が深まっていくでしょう。こうした自由な意見交換は、日頃から自由に話し合える職員環境があることで実現できます。そのためにも職員同士の関係づくりを心掛けることが大切です。このような雰囲気があることで、保育教諭等同士が互いのよさを認め合い、一人一人の保育教諭等の魅力が引き出されていきます。互いに支え合い、また課題を共有し合うことが、職員の専門性を高めていくのです。

〇記録を読み合う・見合う機会をもつ

園児の姿を深く捉えるには記録も有効です。毎日の記録には、保育教諭等が園児を理解する際にどのようなことを大切にしているかが表れています。記録はともすると、閉じられたものになりがちですが、職員同士で開き合い、互いに共有し、そ

こから学び合うことが大切です。

記録には、毎日のねらいに対する振り返りや一日の園児の姿を残す記録もあれば、心に残った場面を記録するエピソード記録もあります。また、園庭や室内などの環境図に園児一人一人の遊びや生活の姿を記しているものもあるでしょう。文字で記すだけでなく、写真も記録の一つです。あるひとときを捉えた写真にはその場面に心を動かされた保育教諭等の思いが込められています。しかし、写真は撮ることが目的ではありません。さらに、写真は見た人によって感じることが様々であるということも意識しておく必要があります。そのため、写真で記録をする際には、写真が園児を理解するための一つの方法であるということを意識し、その写真から読み取れる園児の姿や育ちの状況などが分かるよう、メモやコメントとともに残していくことが必要となるでしょう。

他の保育教諭等の記録には、それぞれの保育教諭等の大切にしている「教育及び保育」の在り方、園児に対する思いが表れています。その記録を残した保育教諭等にとっては、それを他の保育教諭等に広げ、共有することができ、一方で、他の保育教諭等にとっては、思いも掛けない捉え方があることで、その人自身の園児を理解する視点を広げることにつながります。一つの記録から、園児の姿をどのように捉えられ得るか、自分なりの視点を話し合うなどもよいでしょう。こうした記録から、保育教諭等自身の園児の理解をより深めることにつながっていきます。

④園児の理解を深めるための研修の在り方

〇互いの「教育及び保育」を見合う

園児の理解を深めるために、保育教諭等が実際の「教育及び保育」の場面を互いに見合うことも大切です。園内研修などを通して、保育教諭等同士で見合う機会を設けることで、同じ園の中で展開されている「教育及び保育」の在り方を互いに共有し、深め合うことができます。他の保育教諭等がもつ環境の構成における意図や環境の生かし方から、環境の効果的な構成の仕方など自分自身の知識の広がりを学ぶこともあるでしょうし、互いに課題を共有し、検討することが可能になることもあるでしょう。また、公開保育などの機会を利用し、他園に赴くことで、他園の取組から「教育及び保育」の新たな気付きを得ることもあるでしょう。見るという行為は、観察者に徹することができるため、日頃、担任として園児と関わっていると見えにくい、園児の新たな発見や発達的な特徴を改めて捉え直すことができるとい

うよさがあります。

また、見合うということは、実践の現場に足を運ぶだけでなく、写真記録やビデオ等による動画記録などでも行うことができます。ビデオ等の記録から、ある場面を繰り返しじっくりと見ることで、普段、見過ごしていた園児の姿など、新たな視点で捉え得ることができます。

「教育及び保育」を見合うとき、気を付けなくてはならないことは、互いを批判し合う場ではないという点です。専門性が高まると、どうしても自分ならこうするという思いにとらわれますが、保育教諭等がそれぞれの意図をもって実践しているということを理解し、実践をしている保育教諭等の思いを尊重した上で、意見を伝え合っていくことが大切です。そのためにも互いに、よりよくしていこうという視点をもち、よい点を見付け、疑問をもったときにはその意図を尋ねるなどして、高め合う意識をもつことが大切です。

〇園児を理解するための様々な機会を用意する

園児が乳幼児期を豊かに過ごすためにも園児の理解を深めることが大切であり、そうしたことが「教育及び保育」の質を高めていくことにつながります。そのためにも職員同士が学び合う機会が重要です。

これまで述べてきたように、学び合いの機会は、日頃からの職員同士のコミュニケーションや職員会議、園内や園外で行われる研修など、様々な機会があります。こうした機会は一つだけに限らず、様々な機会を設けることが大切です。

保育教諭等は、経験年数やこれまで培われたものが異なり、また個性があります。さらに、課題や題材によっては適切な話合いの在り方が異なります。

例えば、長期的に園全体でじっくり話し合うことが必要な課題もあれば、明日にすぐに活用したい課題もあるでしょう。また、職員の役割や立場によって、発言に偏りが生じることもあれば、経験年数の少ない保育教諭が発言しやすい場などもあります。「教育及び保育」の質を全体的に高めるためにも様々な機会を用意し、一人一人が受け身にならず、積極的に交流ができているかを捉え、どの保育教諭等にとっても充実した園児の理解の場を設けることが大切です。

園児の理解の場を適切に設けるためにも、職員集団において保育教諭等同士の関係性や園全体の雰囲気を捉え直すなどして、具体的な方法の改善が求められます。

〇評価の妥当性や信頼性について

「教育及び保育」における評価とは、園児一人一人の特性をどのように捉えるかということであり、園児の理解そのものであると言えます。園児の理解は、保育教諭等が一人一人と直接に触れ合い、園児の言動から、その思いを受け止めてその園児のよさやその後に広がる可能性を捉えようとすることを指します。こうした理解は、保育教諭等との関係性の深まりやそれまでのその園児の生活する姿や遊びの理解により生まれます。そのため、園児の理解は園児との関わりの中で、変容していくものでもあります。園児の評価は、園児一人一人のその時々の姿から、適切な関わりについて検討したり、園児に対する関わりを改善したりしていく手掛かりを求めることなのです。

そのため、評価の特徴として、それまでの保育教諭等の経験に基づく子ども観によるところが大きいと言えます。特に園児の生活や遊びに大きな影響をもたらす環境は、環境をつくり出す保育教諭等により、その考え方の下に構成され、園児の活動の姿は環境から導かれるものでもあります。これらのことから保育教諭等は、評価の妥当性や信頼性を高めるためにも、記録などを通して、園児との関わりや環境などについて振り返り、省察することが必要です。また、他の保育教諭等と共有し、多角的な園児の理解に努めることが求められます。そのような観点からも研修はとても有効な方法です。

（２）園児の理解を基にした「指導計画の作成」

ここまでは、「園児の理解」の重要性について述べてきました。「環境を通して行う教育及び保育」を展開していくためには、「園児の理解」を基に「指導計画」を作成していくことが必要です。

ここからは、園児の理解を基に、指導計画を作成する際、どのような考え方で作成していくのかについて、また、作成した指導計画を基にどのように「環境の構成」を考えていくとよいのかについて、具体的な例を通して考えていきます。

〇園児の生活する姿を捉え、経験してほしいことや育てたい方向を考える

指導計画を作成するときには、二つの視点が必要になります。

一つは、園児にとって必要な体験が得られるようにするための保育教諭等の視点です。園児に対してどのような成長を願うのか、保育教諭等が自己の意図を明確にもって計画を立てていく必要があります。基本になるのは、各園の園目標や、育てたい園児の姿です。幼保連携型認定こども園では、園の目標に向かって育つための道筋である「全体的な計画」が作成されています。園児の発達に沿って、見通しをもち作成しているので、それを参考に考えていくとよいでしょう。しかし、園児の発達の状況は、毎年全く同じというわけではありません。「全体的な計画」を参考にしながらも、今、目の前にいる園児の育ちはどうなのか、保育教諭等はどのようなことを体験してほしいと願っているのか、園児の姿から読み取り、実態に合わせて、指導計画を作成する必要があります。

もう一つは、園児側からの視点です。園児一人一人の興味や関心に沿って、主体的な活動ができるように計画を立て、環境を構成していく必要があります。園児は、まだ学びの芽生えの時期にあり、自らが「やりたい」「やってみたい」と思うことが何より強い動機となって活動に取り組みます。学ぶために活動するのではなく、楽しいから活動する、そしてその活動の中に多くの学びがあるのです。

また、心を動かしながら環境に関わることは、充実感や満足感につながり、主体的に環境と関わりながら遊びや生活を進めていく園児を育てていく基盤となります。園児は、今、何に興味や関心をもっているのでしょうか。どのような環境の構成をすれば興味や関心をもち、体験の幅が広がったり深まったりするでしょうか。

この二つの視点のバランスを取りながら、指導計画を立て、環境を構成していくことが大切です。

これらを考えるためには、「第２章１．（１）「教育及び保育」における「園児の理解」」で述べたような園児の姿の読み取りが非常に大切になってきます。園児の理解を基に、園児の実態に応じて指導計画を作成していきましょう。

〇年・学期・月など「長期の指導計画」を作成する

まず、「長期の指導計画」について触れていきます。幼保連携型認定こども園では、全職員が協力し「全体的な計画」を作成することになっています。「全体的な計画」を基に、園児の生活や発達の過程を見通しながら具体的に作成していくものが「長期の指導計画」です。

「長期の指導計画」の中には、園児の発達の節目を探り、発達の節目ごとに一年をいくつかの期に分け、期ごとにねらいや内容などを考えていく作成の仕方もあります。

なお、以下では、期ごとに作成する計画(期案)を例に挙げ述べていきますが、その他の長期の指導計画であっても以下の手順や考え方、留意点などは変わりません。

【長期の指導計画作成の手順や考え方・留意点】

ア)前の期の園児の姿を振り返る

作成する際には、前の期の振り返りや評価から、園児が育ったこと、課題となっていることなどを把握し、指導計画に生かしていくことが必要です。

イ)ねらいを立てる

ねらいは園児に合っているでしょうか。「このねらいは、すでに達成されているのではないか」「少し、高すぎるのではないか」など、目の前の園児を見ながら一歩先の姿をイメージしてねらいを設定するとよいでしょう。もちろん、園児と一言で言っても様々な園児がいます。一人一人違います。保育教諭等には、個々を見る目と全体を捉える目が必要です。ねらいを設定するときには学級という集団全体を見る必要があります。

ウ)内容を考える

内容というのは、ねらいを達成するために指導する事項であり、具体的な活動を指しているわけではありません。園児がねらいに対して、様々に体験することとも言えるでしょう。どのような体験をすることで、これらのねらいに迫ってい

けるのかを考えましょう。

ねらいに対するアプローチの仕方はいろいろあります。同じねらいであっても、園児の興味や関心、発達、季節などの周りの環境の変化に合わせ、様々な道筋を通って、ねらいが達成される方向に向かえばよいのです。園児に合わせながら、ねらいを達成できるように内容を考えていきましょう。

エ)必要な体験が得られるような状況をつくり出す

ねらいを達成するために、保育教諭等は、どのように活動を提示し、どのように援助していくのか、どのような環境の構成にしていけば園児に必要な体験が得られるような状況をつくり出していくことができるのかを具体的に考えていきます。

〇週案や日案など短期の指導計画を作成する

このようにして考えた「長期の指導計画」を基に、より具体的に週案や日案など「短期の指導計画」を作成し、指導していくことになります。

週案や日案を作成していく際には、「長期の指導計画」での手順や考え方、留意点などに加えて、生活の流れやリズム、環境の構成などを含め、保育教諭等の指導をより具体的にイメージして作成する必要があります。どこまで細かいことを書くかということは、週案であるか日案であるかにもよりますが、次のことがポイントとして挙げられます。

【週案や日案など短期の指導計画を作成する】

・一日の生活の流れに無理はないか

園児は、登園してから徐々に調子が出てきます。集中してほしい活動があるとしたら、朝方の最初ではない方がよいかもしれません。また、せっかく没頭して遊んでいたのにそれを止めて呼び集めるのもよくありません。できるだけ園児の遊びが小間切れにならないように配慮する必要もあります。

園児がずっと集中しなくてはいけない状態でいたり、体を使って動く状態でいたりするのも難しいので、うまく緩急をつけ計画を立てることも必要になるでしょう。幼保連携型認定こども園では、特に、集中して遊びに取り組む場とくつろいで過ごす場のバランスに配慮が必要です。

また、年長児は園児自身が一日の流れがわかるような環境の工夫も必要になっ

てくるでしょう。

・場の取り方は適切か

　例えば、園児が活動している場は、残しておけるのか、片付けなくてはいけないのかによってもその後の活動の仕方は大きく違います。継続して活動してほしいと考えているのなら、片付けなくてもいいような場を考えなくてはなりません。

　また、その遊びの場は園庭や保育室のどこに構成すれば、園児全体の動きが重なり合うことなくそれぞれの遊びの場が保障されるのかなど、園児の動線も考えましょう。

　さらに、他の遊びの場との兼ね合いも考える必要があります。製作遊びのそばでごっこ遊びが展開されれば、ごっこ遊びの中で必要になったものを作り、作ったものをごっこ遊びに取り入れるという遊びの流れが生まれやすくなるでしょう。

　絵本の場や製作遊びのそばに、ショーごっこなど、にぎやかな活動があるのは落ち着かないということがあります。静的な場、動的な場が干渉し合わないように遊びの場を考えていく必要があります。

　しかし、あまりにも、遊びの場ごとにしっかり区切ってしまうと刺激が得られないということもあります。園児は、自分の遊びをしながらも、友達の遊びを見たり、影響を受けたりします。ときには、保育教諭等が思いもしなかったところで、つながったりもします。

　年長児の場合は、保育教諭等だけがこれらのことを考えるのではなく、園児と一緒に考えてもよいでしょう。

　そして、環境の構成は一度行ったらそれで終わりということではありません。遊びとともに場が変化していくためには、環境を再構成する必要も出てきます。これからの活動がどのように展開されていくのかを予想して場を構成していく必要があるのです。

・保育教諭等はどのように関わるのか

　保育教諭等は人的環境の一つです。その場の状況に合わせて考えなくてはいけないこともありますが、計画段階からどのように園児に関わったらよいのか考え

ておく必要があります。年齢や園児の様子などに合わせて、直接的な声掛け、一緒に遊ぶ、モデルになる、環境を再構成する、見守るなど様々な関わり方があります。

・遊具や用具はどのように用意するのか

遊具や用具は、園児の発達、興味や関心などに合わせて用意することが基本です。３歳児の学級では、園児が「やりたい」と思った機を逃さずに体験させたいので、同じものをたくさん用意しておくことが必要になってきます。また、５歳児では、試したり、工夫したりできるような素材や材料などをたくさん用意したいなどと考えるでしょう。また、園児の体験の幅が広がるように、新しいものとの出会いも所々で入れ込んでいくことも大切です。

・季節の自然との関わりは入っているか

季節のものや自然は、その時期を逃すと一年出会えないものもあります。園児が自然の美しさや不思議さ、大きさを感じるなど、自然に対する興味や関心が広がっていくことが可能となるよう、時期やタイミングを逃さず、様々な形で取り入れていきましょう。

・保育教諭等間の連携

園児は園生活全体を通して育てていくものです。そのため、保育教諭等で園児の育ちを共有しておく必要があります。また、ある学級で行っていた活動が、他の学級や学年の園児たちに影響する場合もあるでしょう。幼保連携型認定こども園では、一日を通して様々な職員が園児に関わることが予想されます。同じねらいに向けて教育及び保育を展開していけるよう、計画は、学級担任の保育教諭だけが計画し、把握していればよいというものではなく、園児に関わる保育教諭等全員が周知し、連携して教育及び保育に当たる必要があります。

ここで、以上のポイントを基に作成された週案を見てみましょう。ここでは主に、５歳児学級の教育課程に係る教育時間の計画について例示しています。

以下の週案は、11 月Ｈ園の発表会２週間前の週案です。発表会も様々なやり方があります。何をねらいにするかによって、発表会自体の形は異なってきます。

完成された脚本を基に、オペレッタや劇をしっかり演じることに主眼を置く園もありますが、H園の発表会は、「発表会」という共通の目的に向けて、園児たちが４～５人のグループに分かれ、内容を相談したり、必要な物を友達と一緒に作ったりするなど、園児と共につくり上げていく過程を大切にした発表会にしています。

【週案の背景】

「発表会で何がしたい？何を見てもらいたい？」というところから園児と話合いを始めます。見せたいものは、劇、合奏、歌、といった、発表会定番のものから、「作ったドレスやドラゴンを見せたい」「忍者のような技を見せたい」「虫についての研究発表をしたい」など、園児の「見せたいもの」は多岐にわたります。

しかし、どれを選択したとしても、わかってもらうように表現するという根本は変わりません。また、やりたい子たちがばらばらに演じればよいのではなく、一つのお話の中に、やりたいことを組み込むようにして、皆の発表会にしています。

そのため、園児には話合いが必要になってきます。さらに、どのような大道具や小道具、衣装が必要か、細かいセリフなどもやりたい役ごとのグループで話し合い、作る機会を設けるようにしています。つまり、共通の目的をもつこと、友達と一緒に考えたり試したりすること、表現することなどが必要とされる状況をつくり出しているのです。

また、話合いが難しいことは、担任の保育教諭にとって大きな課題でした。園児が「自分のこととして捉え考えられるようにすること」また、長時間の集中は園児にとって負担になることも考えられるので、「簡潔な話合いになるようにすること」が必要だと考えました。

そこで、

- **様々な意見が出た場合は、すぐに決定せず、考えるための日や時間をもつようにし、一つの話合いが長くならないようにする。**
- **皆の声を聞き逃すことのないよう、ホワイトボードに意見を書いておき、自分の名前のマグネットを参加したいものや賛成する方に貼るなどし、園児が自分のすべきことが分かったり目的を意識したりしながら、話合いに参加できるようにする。**

などの工夫をしました。

さらに、発表会は舞台で表現することから、観客に理解してもらったり、普段の遊びとは違う製作物を作ったりする機会もあります。今まで使ったことのない素材や材料などに出会える機会も大切にしたいと考えました。

【週案を作成する際のポイント】

・<u>一日の生活の流れに無理はないか</u>

一日の流れはホワイトボード等を利用して伝え、見通しをもって生活できるようにしています。また、話合いは昼食前に皆で集まる形をとっています。５歳児

では、保育教諭等が全て決めてしまうのではなく、園児と相談しながら、決めていくことも大切です。発表会までの日数をカレンダーで数えながら、「明日はこれをやろう」「これを頑張らないと間に合わないかもしれない」など、発表会までの見通しをもつことも必要です。また、「昼食の前は発表会のことをやって、昼食後は好きな遊びをする」などと一日の見通しをもてることも必要だと思います。全て保育教諭等が決めてしまうのでなく、５歳児の後半になったら、一緒に考えていくという姿勢が必要となるでしょう。

・場の取り方は適切か

刺激を受け合えるように、「壁面には発表会に向けての活動を撮影した写真を掲示し、活動の進み具合や他グループの様子が見られるようにしていく」といった配慮がなされています。

・保育教諭等はどのように関わるのか

【保育教諭等の援助】に具体的に示されています。

・道具・用具はどのように用意するのか

ホットボンドについて書かれています。「必要なものを作る」というように書かれていますが、「必要なもの」とは、園児と相談していく上で、その後に一緒に考えていくということです。

・季節の自然との関わりを取り入れているか

ヒヤシンス、芋のつる、松ぼっくりなどの自然との関わりや自然環境の変化への気付きなども盛り込まれています。

・保育教諭等間の連携

この時期は、どうしても発表会に担任が関わる時間が多くなります。また、７チームあり、それが一つのまとまった話になるまでは、それぞれのチームで動くことになり、全体を見ることが難しくなります。年長の担任２人と副担任１人の連携はもちろんのこと、「他学年の保育教諭等と連携を図りながら、個々の園児の様子を把握する」ことが必要です。

上記を基に作成した週案

11月第４週　　年長組　担任保育教諭　●●●●

園児の姿	○焼き芋をすることを楽しみに落ち葉集めをしている。年少中に焼き芋屋さんとしてあげることも考えている。 ○先週、発表会に向けての話合いを始めた。自分のやりたい役を決め、イメージをもち始めて楽しみにしている。他の子の話を聞いて自分なりに考えるようになったり、イメージを共有するようになったりする様子が見られる。 ○さくらんぼ山に見張り台を作ろうと力を合わせる姿やホットボンドで松ぼっくりを使ってクリスマスツリーを作る姿などが見られる。	ねらい・内容	○友達と相談しながら遊びを進めていく ・発表会に向けて、みんなで相談したり準備したりする ・友達とイメージを共有して遊ぶ楽しさを味わう ・遊びに必要なルールや決まりを考えようとする ・自分の考えたことを伝えたり、相手の考えを聞いたりする ○秋の自然に興味や関心をもつ ・焼き芋を通して収穫の喜びや秋の味覚を味わう

環境の構成・保育教諭等の援助

【環境の構成】
○発表会に向けて
・発表会が年長のみんなの共通のめあてとして位置付くように活動の進み方が子どもたちに見えるようにホワイトボードや共有スペースの環境を構成していく。壁面には発表会に向けての活動を撮影した写真を掲示し、活動の進み具合や他グループの様子が見られるようにしていく。
・役ごとのグループは自分のやりたいことを選んだので、同じ役の子たちと意見を出し合いながら、どんな内容にするのか、必要なものは何かなどを打ち合わせていく場を作る。昼食前に進捗状況を報告し合ったり一緒に弁当を食べたりすることで共通の意識がもてるようにする。
○ヒヤシンスの様子、園庭の自然環境の変化（落ち葉、イチョウやモミジの色づき）なども話題にし、季節の変わり目を感じながら遊びに取り入れていくことができるようにする。
○木工遊び
木工やホットボンドを使った製作遊びは継続して行う。先週芋掘りをしたので、芋のつるを使ったリース作りや松ぼっくりを使った飾り作り等にも興味がもてるようにする。

【保育教諭等の援助】
○発表会に向けての活動では、園児のイメージを大切にしたり、一人一人のよさを周りに伝えたりしながら、皆で一つのものを作っていくという意識がもてるようにする。
また、ほとんどの役で年長 2 つのクラスの子が混じっているので、親しみをもちながら話合いや製作を進めていけるように橋渡しをしていく。友達と一緒に作りあげていく意識がもてるように声を掛けていく。
○発表会の取組が、伝えるよさや聞くよさを体験する機会となるように心掛け、それぞれの子の意見を尊重しながら話を整理していく。
○それぞれが自分の思いを主張する中で起こるトラブルでは互いの話をよく聞いたり、伝え合ったりする場を保育者が作り、自分たちで解決できるようにしていく。また、自分たちでルールを決めながら取り組むことが解決につながることに気付くことができるように調整したり、言葉を補っていく。

○発表会に担任が関わる時間が多くなるので、他学年の保育者と連携をとりながら、個々の子どもの様子を把握する。
○徐々に寒くなってきている。手洗い、うがい、衣服の調節、ドアの開閉等、寒い時期ならではの配慮をしながらみんなが気持ちよく生活できるようにしていく方法を考えていく。
○1 日の流れはホワイトボード等を利用して伝え、見通しをもって生活できるようにしている。自分で片付けや集まりの時間を意識し、時計や数字に興味や関心がもてるようにしていく。

【行事・その他】
○誕生会　21 日
・11 月生まれの子をお祝いする。
・小学校の PTA コーラスを聴く。
○どんぐり文庫、2 学期最終貸し出し
○歌

	19 日（月）	20 日（火）	21 日（水）	22 日（木）	23 日（金）
活動	○焼き芋 ○発表会に向けての活動 ・必要なものを作る・どんなことをするのか役の中で考える ・役の子と弁当を一緒に食べる	○発表会に向けての活動 ・必要なものを作る ・進捗状況を伝え合い、役の子と一緒に集会室で弁当を食べる	○誕生会 ○おやつ（せんべい）を食べる ○発表会に向けての活動 ・必要なものを作る	○発表会に向けての活動 ・必要なものを作る ・役ごとに分かれてやってみる ○どんぐり文庫	勤労感謝の日
		誕生会：10:00 開始	どんぐり文庫：2 学期最終貸し出し		

○「教育課程に係る教育時間」前後の指導計画に視点を当てて考える

次に、「教育課程に係る教育時間」前後の指導計画について考えてみます。

園の実態によって、一日を通して同じ集団で生活をしている園、「教育課程に係る教育時間」は年齢ごとの学級集団で「教育及び保育」を行い、「教育課程に係る教育時間」前後は異年齢で過ごすなど集団を変化させながら過ごしている園など、様々な園があるでしょう。

また、指導計画においても、それぞれの時間ごとに様式を考え指導計画を作成している園、一日を通して同じ様式で指導計画を作成している園など、様々な園があるでしょう。

指導計画を作成する際のポイントなどは、先に述べた「指導計画を作成する際のポイント」と同様ですが、ここでは特に「集中して遊びに取り組む場と家庭的な雰囲気の中でくつろぐ場の配置」と「一日の生活の連続性への配慮」を意識しておく必要があります。朝早くから、また、夕方まで在園する園児の、長時間にわたる園生活に配慮した指導計画を立て、養護の視点を重視しながら環境を構成していくことも必要となるでしょう。

指導計画の作成において環境の構成を考えていく際に必要な具体的な手立てを、以下に示していきます。

○ゆったりと自分のペースで過ごせる家庭的な雰囲気の環境を構成する

「教育課程に係る教育時間」後の「教育及び保育」では特に、参加・不参加を含めた園児の活動への関わり方は、より柔軟であることが求められます。長時間在園するため、疲労することもあれば集中力が続かないこともあり得ます。「教育課程に係る教育時間」で思い切り体を動かしたり集中して遊んだりした日の午後などは、なおさらそうでしょう。そのようなときに、家庭的な雰囲気の空間や自分のペースでゆっくりと遊べる遊具など、くつろいで過ごせるような環境があると、園児は安心して過ごすことができます。

３歳頃の園児は、午後、個人差はありますが午睡をする園児もいるでしょう。４歳以上であっても、午睡はしないけれど静かに横になって休みたい園児もいます。保育教諭等が園児の発達や家庭との生活の連続性などを意識しながらそのような状況へ対応していくことが重要です。例えば、保育室に隣接した空間に、自分のペースでのんびりと過ごすことができるスペースを設けるなどの配慮が、環境の構成と

して必要となるかもしれません。

また、特に猛暑の季節や風邪などが流行る時期は、先に述べたようなスペースに保育教諭等不在で園児のみ休息させることは避けなければなりません。保育教諭等職員が、一定時間そこで園児の見守りをする必要があります。

長時間生活する園児の心身の健康に配慮しながら、保育教諭等が園児一人一人の心身の状態に応じて、丁寧に関わることができる環境の構成が必要です。園児にとっては、保育教諭等に様々な欲求や感情を受け止めてもらえるという安心を感じられるような環境がより大切になるでしょう。

〇一日を通して行う「教育及び保育」を意識する

ここまでは、「教育課程に係る教育時間の指導計画の作成」と「教育課程に係る教育時間前後の指導計画の作成」についてそれぞれ述べてきましたが、幼保連携型認定こども園では、これらの指導計画について、「一日を通して行う教育及び保育」というものを意識しながら作成していくことが大切です。それぞれの担当職員がばらばらに作るのではなく、一日の流れに応じた園児の実態を捉え、活動の動と静を意識したり、「教育課程に係る教育時間」における環境を柔軟に「教育課程に係る教育時間」後の「教育及び保育」に取り入れたり、「教育課程に係る教育時間」後の環境を次の日の「教育課程に係る教育時間」の環境に取り入れたりしながら相互につながりがもてるように考えていくことが重要となるでしょう。（詳細については、「第２章３．多様な園児が過ごすことに配慮した環境の構成」参照）

そのためにも、保育教諭等同士が、それぞれの指導計画の内容について共通理解をすることが必要です。園の全職員間で連携を図りながら、「教育及び保育」の環境を構成していけるようにしましょう。

（３）指導計画を基に環境を構成する

教育及び保育における環境は、作成した指導計画を基に構成していきます。

では、作成された指導計画を基に、実際にどのような環境を構成していけばよいのでしょうか。以下では、その環境の構成について、実際に作成された指導計画と、その指導計画を基に構成された環境図を参考にいくつか紹介します。

〇指導計画を基に環境を構成していく（各年齢における参考例）

週案と、週案で計画された指導の内容や園児に体験してほしいことなどを踏まえ、保育教諭等が自身の願いを込めて構成していく環境について、３歳児、４歳児、５歳児のそれぞれの時期の週案・環境図と、「教育課程に係る教育時間」後の週案・環境図について取り上げてみます。

なお、ここで例として取り上げているのは、「指導計画を基に環境を構成していく」という流れについて、また、保育教諭等が、園児の発達の状況や興味や関心、さらに、人や物、場や空間など環境のもつ教育的及び保育的な価値を捉えながら「園児の理解を基に、自身の意図や願いを込めて環境を構成していく」ということを考えていくためであり、同じ時期にどこの園でもこの環境を構成すればよいということではないということに留意が必要です。

①　３歳児４月第２週

この園では、一日の園生活の流れを見通し、朝方から夕方まで一日を通して同じ様式で指導計画を立てています。

幼保連携型認定こども園では、３歳児の初めの時期に２歳児から移行する園児と新たに入園してくる新入園児が共に過ごすこととなります。どちらの園児にとってもまずは、安心して３歳児学級としての生活をスタートすることができるような配慮が必要になります。生活の基盤となる身支度の仕方を丁寧に知らせる工夫をしたり、２歳児のときに経験していた遊具や家庭での経験などを踏まえた遊びを取り入れたりしながら環境を構成していく必要があるでしょう。

３歳児４月第２週の週案・環境図を参照

３歳児４月第２週の週案

令和３年度　３歳児●組 第Ⅰ期（4月上旬～5月下旬） 4月12日～4月17日	期のねらい	○新しい環境に慣れ、安心して過ごす。 ○保育者や友達に親しみ、好きな遊びを楽しむ。	園長		副園長		担任	

子どもの実態	・新しい保育室や保育者（人数も減って）など環境の変化に不安や緊張を感じ、泣いて保護者から離れない幼児もいる。保育者と一緒に入室ししばらくすると泣き止み、興味を示した物に触れ保育者と一緒に遊び始めている。ままごとやブロックなど昨年度から継続した玩具や家庭と同じ玩具があることでスムーズに遊びだし安心する様子が見られている。友達のしていることにも興味を示し同じことをしようとする姿がある。 ・生活の流れは大きく変化していないので、自分でできることは自分でやろうとする幼児も多い。	ねらい	○保育者に親しみを持ち、安心して過ごす ○興味や関心のある素材や遊具に触れて遊ぼうとする ○保育者と一緒に身の回りのことを自分でやろうとする	内容	・困ったことやしてほしいことを保育者に動きや言葉、表情などで伝えようとする。 ・担任の名前を覚え、呼んだり関わったりする。 ・園生活や学級の約束を知る。 ・自分の好きな遊びを見付けて自分から遊ぶ。 ・新しい素材や遊具に触れて遊ぶことを楽しむ。 ・友達のしていることに関心をもつ。 ・生活の流れが分かり身の回りのことを保育者と一緒にしようとする。
環境の構成と援助の工夫	・一日の中で必ず一回は全員と関わったり名前を呼んだりして、積極的に子どもの側に行き、やりたいことや思いを捉えていくようにする。 ・好きな遊びを見付けることができるように興味をもちそうな遊具や素材（紙、空き箱、チラシを丸めた棒、京花紙など）を数や種類を考えて多めに準備しておく。昨年度から引き続き遊べるような遊具も用意し、安心して遊ぶことができるようにしていく。遊びが見付からない幼児には興味がもてそうな遊具を見せたり、友達の遊んでいる様子を保育者と一緒に見たりしていく。 ・ちょっとしたことで「できた」「やれた」と思うような物を用意しておく。塗り絵やくるくる棒などすぐに遊びだすことができる教材を準備しておく。 ・新しい担任のため、一緒に遊ぶ中で関係を築いたり、絵本や紙芝居の読み聞かせの時間や活動前に集まる時間などを設け、楽しい雰囲気を作ったりしていく。 ・身支度は新しい環境でも安心して行うことができるように、マークや写真でやり方や場所を示し自分で身の回りのことを始末しやすいようにしておく。 ・遊具や素材の片付け場所に写真やイラストを表示したり、入れ物を分けたりして片付けが自分でできるようになるために場を整えておく。 ・登園時や遊んでいるときに不安を泣いて表す幼児がいたときには保育者の近くで過ごしたり、生き物（虫、おたまじゃくしなど）を見て気持ちを落ち着かせたり、一人の空間を用意したりするなどして安心感をもてるようにし、保育室が居心地のよい場所になるようにしていく。 ・園庭へ出るときに2グループに分かれるなど時差を付け、下駄箱が混まないようにし一人一人が余裕をもって身支度をすることができるようにしていく。靴の脱ぎ履きなどは左右を間違わずに履いているかなど見ていき、自分で取り組んだことを認めながら声をかけていくようにする。				

	4/12日（月）	4/13日（火）	4/14日（水）	4/15日（木）	4/16日（金）	4/17日（土）
生活の流れ	○順次登園する ・挨拶、身支度をする。 ・手洗い・うがいをする。	○順次登園する ・挨拶、身支度をする。 ・手洗い・うがいをする。	○順次登園する ・挨拶、身支度をする。 ・手洗い・うがいをする。	○順次登園する ・挨拶、身支度をする。 ・手洗い・うがいをする。	○順次登園する ・挨拶、身支度をする。 ・手洗い・うがいをする。	○順次登園する ・挨拶、身支度をする。 ・手洗いをする。 ○好きな遊びをする ○片付けをする ○昼食をとる　11：40 ○着替えをする ○午睡をする　12：45 ○おやつを食べる　15：00 ○降園準備をする ○1歳児保育室・どんぐりの部屋で遊ぶ ○順次降園する
	○好きな遊びをする ・室内…塗り絵・描画・粘土・製作（紙を丸めて食べ物作り、型のウサギやネコなどを使ってペープサート作りなど）・ままごと・ブロック、図鑑 ・園庭…虫探し・砂場遊び・築山昇降　など　ウッドデッキ…体操　など ・校庭…虫探し・おいかけっこ・オオカミごっこ　など					
	○片付けをする。 ○昼食をとる。 ○おなかやすめをする。 （絵本、ブロック　など） ○午睡をする。 ○おやつを食べる。 ○降園準備をする。 ○校庭・園庭・室内で遊ぶ。 ○順次降園する。	○進級（入園）祝い会に参加する。 ○片付けをする。 ○昼食をとる。 ○おなかやすめをする。 （絵本、ブロック　など） ○午睡をする。 ○おやつを食べる。 ○降園準備をする。 ○校庭・園庭・室内で遊ぶ。 ○順次降園する。	○体操をする。 ○片付けをする。 ○昼食をとる。 ○おなかやすめをする。 （絵本、ブロック　など） ○午睡をする。 ○おやつを食べる。 ○降園準備をする。 ○校庭・園庭・室内で遊ぶ。 ○順次降園する。	○ピアノに合わせてリズム遊びをする。 ○片付けをする。 ○昼食をとる。 ○おなかやすめをする。 （絵本、ブロック　など） ○午睡をする。 ○おやつを食べる。 ○降園準備をする。 ○校庭・園庭・室内で遊ぶ。 ○順次降園する。	○一斉で簡単な引っ越し鬼をする。 ○片付けをする。 ○昼食をとる。 ○おなかやすめをする。 （絵本、ブロック　など） ○午睡をする。 ○おやつを食べる。 ○降園準備をする。 ○校庭・園庭・室内で遊ぶ。 ○順次降園する。	
行事		進級（入園）祝い会				